

理想の外国語(英語)教育を目指して —異文化教育の盲点—

栗 原 優

[要旨] 「外国語を知れば外国のことが分かるのか」という問いに対しては、‘No.’と言わざるを得ない。英語教師は「英語」を教えるが、「英語」そのものを教えることが究極目的ではないであろう。「異文化教育」「比較文化」などの言葉が大きく唱え始められたのは、ほんの30年ほど前のことである。つまり、英語教師は「英語圏文化」にも精通していなければならないということは、極く最近になって注目を浴びたことである。

筆者は「文化を教育することはできない」が「紹介することはできる」と考えている。教師が個人の価値観を踏まえずに紹介した上で、各々の学生・生徒が「理解」するのである。

では、理想の「外国語(英語)教育」、「異文化理解」とはどのようなものか。文部科学省発行の学習指導要領とその解説を中心にこれを考察し、「異文化理解の盲点」を指摘した上で、最終的に「外国語学習」と「異文化理解」の関係を論じた。

[キーワード] 異文化理解、文化変容、外国語(英語)教育、社会言語学、比較文化学

1. はじめに

外国語を教えるだけでは、真の異文化理解にはつながらない。「外国語(そのもの)」「を」教えるのか」あるいは「外国語「で」(何かを)教えるのか」(教員が教室で英語を使用して講義を行うという意味ではなく、「外国語を通じて」という意味である。)には大きな違いがあり、文部科学省のいうところの「外国文化の理解」という点においては、理想としては後者になろう。そのために教員は、ソシュールのいうところの「外的言語学」(社会言語学など)の知識も持ち合わせていなければならない。「言葉を知れば外国のことが分かるのか」という問いに対して、‘No.’という立場から論議を進めていく。

2. 「を」と「で(を通じて)」の両立

外国語を教えることと、外国語で(を通じて)教えることは全く異なる。外国語を教えるならば、正しい文法(構文)、語彙、発音などを教授すればよい。したがって、1970年代初め頃までの中学校で初めに教え込まれた、例えば、

I am a boy.
Are you a girl?

や、

This is a pen.
Is this a dog or a cat?

などの、どう考えても一般的に日常使われないような内容的にナンセンスな文であっても、文法的に非文でなければ一向に差し支えない。(私の知り合いの英国人は、「“This is a pen.”などという文を自分は使ったことはない。もし可能性があるとするれば、中身の見え

ない箱の中に手を入れて、何が入っているかを当てるゲームをしている時くらいだろう。」と苦笑しておられた。)

しかし、現在中学校、高等学校で求められている外国語能力は、いわゆる「コミュニケーション重視」の外国語教育であって、上記の「を」と「で(を通じて)」の両立の難しさはあまり重視されていないように感じられる。

3. 中学校及び高等学校における「外国語」及び「英語」の位置付け

平成10年12月に告示され、平成15年12月に一部改訂された『中学校学習指導要領』で、第9節「外国語」の項目には次のように書かれている。

第1 目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。(p.90)

そして、第2「各言語の目標及び内容等」では、その中の3として「指導計画の作成と内容の取扱い」が記されているが、その(2)として、

(2)教材は、英語での実践的コミュニケーション能力を育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史などに関するものの内から、生徒の心身の発達段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点に配慮する必要がある。

- ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。
- イ 世界や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高

め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。

- ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際強調の精神を養うのに役立つこと。

(前掲書p.97)

というように、異文化理解の重要性をうたっている。

余談ではあるが、同書p.91～92には、「言語活動の取扱い」が書かれており、「言語の使用場面の例」として

a 特有の表現がよく使われる場面

- ・あいさつ ・自己紹介 ・電話での応答
- ・買い物 ・道案内 ・旅行 ・食事
- など

b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面

- ・家庭での生活 ・学校での学習や行動
- ・地域の行事 など

また、「言語の働きの例」として、

a 考えを深めたり情報を伝えたりするもの

- ・意見を言う ・説明する ・報告する
- ・発表する ・描写する など

b 相手の行動を促したり自分の意思を示したりするもの

- ・質問する ・依頼する ・招待する
- ・申し出る ・確認する ・約束する
- ・賛成する/反対する ・承諾する/断るなど

c 気持ちを伝えるもの

- ・礼を言う ・苦情を言う ・ほめる
- ・謝る など

が挙げられているが、実際に生活していて日本語だけで事足りる日本の中学生に対して、これらの事柄を英語で表現できるようにさせることは難しいであろう。日本で生活している限り、英語はほとんど必要ない。日常のコミュニケーションで英語が使われなくて済

む日本の環境こそが、英語に対しての学習意欲につながらないばかりか、英語能力の伸び悩みになっていると筆者は考えているが、そのことが指摘されることは少ないように思う。

さて、本題に戻ろう。第1の「目標」は、3つの骨子からなるが、この冒頭に掲げられているように、中学生の段階から、「外国語を通じて」と明記されており、外国語(英語)自体の学習(Listening, Speaking, Reading, Writing)と共に、それ(英語)を通じた異文化理解が求められているのである。そしてそのための「言語材料」として、

- ア 音声
- イ 文字及び符号
- ウ 語、連語及び慣用表現
- エ 文法事項

など、英語そのものを教えるように指示されている(前掲書 p.93～95)。したがって、英語そのものを教えるとともに、それ(英語)を通じて「目標」である「言語や文化に対する理解を深め」なければならないのである。

では、高等学校ではどうであろうか。

『高等学校学習指導要領』(平成11年3月告示 平成15年12月一部改訂)によれば、「第13節 英語 第1款 目標」として、

英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。(p.379)

と書かれている。これは、中学校での目標を具体的に発展させたものである。そして、「第2款 各科目」として、

- 第1 総合英語
- 第2 英語理解

- 第3 英語表現
- 第4 異文化理解
- 第5 生活英語
- 第6 時事英語
- 第7 コンピュータ・LL演習

の7科目が指定されている(前掲書 p.379～382)。この中で特に注目すべきところは、「第4 異文化理解」である。これは、前回の学習指導要領(平成元年)においては「外国事情」と表記されていた。今回の改定で科目の名称が「外国事情」から「異文化理解」になったのは、言語や文化が政治的な組織としての国家が単位となっていないこと、また、個人個人のコミュニケーションにおいては国家についての理解だけではなく、その国家で日常的に生活している、言語や文化の異なる人々についての理解が大切であるということが理由として挙げられよう。「異文化理解」の目標としては、

英語を通して、外国の事情や異文化について理解を深めるとともに、異なる文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図るための能力や態度の基礎を養う。(『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』p.133. 平成11年12月)

と書かれており、これは明らかに英語かの目標のうちの「言語や文化に対する理解を深める」ことを受けていることが分かる。

そして、さらに注目すべき点は、前記の『高等学校学習指導要領』において、「第13節 英語 第3款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」として、英語に関する学科の指導計画の作成に当たっての配慮事項として、

- (1)「総合英語」及び「異文化理解」については、原則として、全ての生徒に履修させること。
- (2)「英語理解」、「英語表現」及び「時事英語」については、原則として、「総合英語」を履修した後に履修させること。(p.383)

と明言されていることである。

つまり「異文化理解」が「総合英語」と同等に重要視されているのであり、これらのことから、高等学校における英語教育の中で、いかに「異文化理解」、「比較文化学(Comparative Culturistics¹⁾)」が重視されているかが分かる。

なお、高等学校においても『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』第2章「外国語科の各科目」第8節「言語材料」において、

2 [英語言語材料] の取扱い

ア 文型

イ 文法事項

として、取り扱うべき構文や文法事項が細かく定められている(p.83~89)。

4. 文化変容(Acculturation)

「異なった文化を持つ人々の集団同志が互いに持続的な直接的接触をした結果、そのいずれかまたは双方の本来の文化が変化すること」を「文化変容(Acculturation)」という。つまり、何らかの形で旧来の文化が変化することを意味するが、これは次のパターンに分けて考える必要があると思われる。すなわち、

- (1) 強制的(否定的) 受容
- (2) 自主的(肯定的) 受容
 - a. 新規受容(=欠けている事物を補う)
 - b. 置換的受容(=既にある事物(と同じような物事)を交換する)

である。

(1)の強制的(否定的)受容は、文明社会が無文字社会に対して行ってきた例に多く見られる。換言すれば、「強⇒弱」への強制であり、例えば植民地支配などがこれに当たる。「支配」という言葉が当て嵌まるように、このことによって、消える文化もあり、

弊害も大きい。19世紀にアメリカの支配により、ハワイの人達に強制的に衣服(ムームー)を着用させたことなどがこれに当たる。(これは、最初は無理矢理であったが、結果的には気候的にも合っていたために、その後自然と浸透し、定着した。しかし、元来下着を身に着けない人々に下着を着用させることによって、その文化に白黴菌が蔓延してしまったという事実はあまり知られていない。)

それに対して(2)の自主的(肯定的)受容は受け入れる側に欠けている事物、あるいは必要とされている事物が取捨選択されて新規に導入され(=a.)、必要に応じて修正されて(=b.)浸透し(例えば「和式」の物が「洋式」に置き換えられて)、定着するものである。

日本の場合はこの(2) a.および b.に分類される。「呉」の服であった「呉服」を「着物」にアレンジしたことや、遣随使・遣唐使に代表されるように、日本は古くから中国を文化的宗主国とし続け、幕末には宗主国を中国から西欧に代え、そして第二次大戦後はアメリカを文化的宗主国として、強制されることなく、「近代化」という名の下で、自ら受け入れてきた。この場合、日本は「他の文化を学んだ」と表現した方が適切であるとも考えられる。

5. 「異文化教育」の盲点

前節で、「日本の場合、「強制」されていないにもかかわらず、異文化を「受容」してきた」と述べたが、その実情は、「受容」ではなく、その時代時代における外国コンプレックス(日本の文化は遅れているという考え)により、文化的宗主国と決めた国の文化を「盲目的に模倣」してきたのである。これは「文化に優劣はない」という基本的な考え方の欠如の表れである。そしてその結果、「盲目的模倣」は日本本来の伝統的文化を崩壊させた。つまり、新しい文化が日本人・日本文化・風土と合致するかを検証すること無しに「模倣」してきたことによって、換言すれば、文化の表層的側面(Overt Culture)のみを導入することによって、歪みが生じているのである。

いわば、多くは文明社会が無文字社会に対して行ってきたことを、日本人は自ら自分達に強いているのである。例えば、現代の日本語に見られる必要以上の外来語の氾濫や、商品名などの命名の外国語化の多さなどの「日本人のための外国語表記」という矛盾した現象なども、「カタカナ語は格好良い。お洒落に聞こえる」という、西欧語コンプレックス（盲目的欧米崇拜）の一つの表れであろう。もちろんここで、筆者は「日本語の語彙における外来語（カタカナ語）の氾濫」が外国語（英語）学習にプラスに働くか否かを論じているのではない。この問題については別稿で論ずることにする。

さて、「西欧、そしてアメリカの物事をすべて学び取り「近代化」しよう」という、特に日本の「文明開花」以降の欧米に対しての盲目的崇拜は、日本文化の姿を変えた。例えば「西洋人は「個」の確立が進んでおり、独立している。日本人は自立していない」などということは、明治時代から主に日本人によって言われ続けている。そして、「欧米の文化に倣えば独立できる。彼等は素晴らしい」と解かれてきた。そのために生活習慣を変え、家の造りを変え、個室重視の考え方を取り入れた結果、家庭内の団欒は消え、世代の断絶が起こった。また、個室に区切ったために、本来ならば大勢が集まる時に取り外して大きな部屋にすることが出来、また、日本の気候に合った、通気性までも考えられた部屋の仕切り（障子や襖など）がなくなり、それは壁にとって変わり、農耕民族特有の、いわば鍵のない、伝統的地域協力社会は崩壊しつつある。

元来農耕民族であり、一つの物事を皆で力を合わせて成し遂げていくという社会体系と、欧米の考え方は基本的に異なるため、独立心の芽生えにおいて違いがあることは当然のことである。「自分達は劣っている。欧米の物事はとにかく素晴らしい、良い物だ、お洒落だ、日本もそうならねばならない」という猿真似的な文化の表面的な部分だけを盲目的崇拜してきた結果、本来の伝統的日本文化にも歪みが出てきたのである。

外国語学習に置き換えれば、「外国語を知れば外国

が分かる」というのは大間違いであって、単に言語という表層的（Overt）側面だけではなく、深層的（Covert）側面まで理解していなければ、外国を知ったことにはならない。つまり外国語教育には「比較文化学」、つまり、

「様々な文化現象の表層的側面（Overt Culture）のみを比較するのではなく、その深層的側面（Covert Culture）をも探求し、その文化における事物、考え方、価値観を明らかにし、国際社会の中で、正しい異文化意識と理解、更にコミュニケーションを目指すための学際的学問」²⁾

が欠かせないと考えられる。

6. 「外国語学習」と「異文化理解」

文化に対しての知識がなければ外国語（英語）を通じて物事を教えることは不可能である。そして、教える側は、単語一つ一つにも文化が隠れていることに気付いているべきである。一例を挙げよう。

「昨日、蛸を食べたよ。」＝“I ate octopus yesterday.”

という等式は成り立つであろうか。字面では「蛸＝octopus」であっても、その物に対してのイメージや価値観はその言語を使用する背景にある文化によって異なっている。当然、「蛸を食べる」ということに関しても同様である。日本人同士で「昨日、蛸を食べたよ。」と言った場合、それに対して考えられる反応は、「へえ、どこで？ お寿司やさん？ 美味しかった？」などが考えられるが、英語圏文化に属する多くの外国人に“I ate octopus yesterday.”と言った場合、驚きを込めて、“What? Octopus?”というような反応が返ってくる可能性がある。

隠れた文化の違いが原因でこのような応答の差が出るのであるが、同じ物事の価値観に違いがあることに気付かずに、悪い例では、外国でも同じ価値観であろうと思込むことは危険である。換言すれば、その

文化におけるstandardが問題なのであり、同じ物を食べる、着るなどにおいても、その隠れた深層的な(Covert)文化は異なっている場合が多い。英語圏の文化を知らなければ、“What? Octopus?”をただ、「え？ 蛸？」とだけ訳し、多くの場合、それがマイナスのイメージで発せられており、実際は、“You ate octopus? Unbelievable!”という意味が込められている事を訳出できない。もちろん筆者は、英語圏でも蛸を食べる文化を持つ人々や地域を知っている。しかし、一方で、英語において蛸はdevilishとも表され、また「蜘蛛のお化け」であるとも考えられており、一般的に食材としてみなされないことも承知している。世界中を見ても、「蛸」を食べる文化は意外と限られていることに気が付くであろう。翻訳の限界や難しさはここにあると考えられるが、言語の表面的な(Overt)意味を知っているだけでは、言葉の言外の意味を知ることが不可能である。したがって、ただ外国語を知っているというだけで、その文化や文化の背景に対する知識や理解がなければ、外国を完全に理解したとは決して言えない。換言すれば、文法的にはあり得る文であったとしても、意味的には非文になる場合もあるということである。文化の違いによっては、

「昨日、蛸を食べたよ。」≠“I ate octopus yesterday.”

となるのである。

この“octopus”という単語を中学校1年生で採用している教科書がある。学校図書発行の、NEW TOTAL ENGLISH Iである。同書は平成17年(2005年)2月21日検定済み、平成18年2月10日発行であるが、Lesson 1において、つまり、中学生の英語の最初の導入個所で、日本人の女子中学生(Aki)とアメリカ出身の英語の先生(Ms Gina Beck)との会話で、don'tの使い方の指導を目的として、

Aki : Do you like sushi?
Ms Gina Beck: Yes, I do.
Aki : Do you eat octopus?
Ms Gina Beck: No. I don't like octopus. I love salmon.
(p. 20~21)

を採用している。

アメリカ人であるBeck先生が、主語を“We”ではなく個人的観点から“I”としており、また、客観的な動詞である“eat”ではなく、ここでは主観的である動詞“like”を使っていることから別に違和感は感じられないが、筆者が考えておきたいことは、これを教える教員の姿勢である。

筆者の立場としては、もしも生徒が「アメリカ人は蛸が好きではないのか」と考え、質問した場合、教員はこれに答えられるだけの単語一つ一つに至るまでの文化的背景を知っている必要はあるのではないかと考えるのである。

7. 理想的な「言語文化教育」としての「外国語(英語)教育」

まず前提として、筆者は「異文化を教育することはできない」と考えている。しかし「異文化を紹介することはできる」と考えている。そして、

外国語を教えること < 言語文化を教えること
< 異文化紹介(理解)

という関係が考えられるのであって、ただ単に外国語を教えるだけでは外国を理解させることにはならない。外国語教師は、「社会言語学」など、ソシユールの言うところの「外的言語学」も「内的言語学」と同様に研究する必要があり、それを踏まえた上での「外国語教育」が理想である。そして「外的言語学」の研究においては、隠れた文化の研究が重要である。

ただ英語ができるというだけでは実際のコミュニケーションは不充分である。現在声を大にして叫ばれている「コミュニケーション重視」の外国語(英語)教育を充実させるためには、「社会言語学」や「比較文化学」の更なる発展と、研究者の増加が必須であり、教員は「言語は文化の一側面である」という認識を強く持ち、一つ一つの単語に至るまでの価値観を研究し、紹介しながら教授することが理想であると考ええる。

付記

本稿は、平成18年6月に行われた東京言語文化教育研究会での口頭発表の内容と一部重複するところがある。

なお、資料を提供して下さった千葉県習志野市立第五中学校教諭小原弥生氏にこの場を借りて感謝申し上げる。

Hall, Edward, T. *Beyond Culture*. New York: Anchor Books, Doubleday, 1977.

Harris, Philip R. and Robert T. Moran. *Managing Cultural Differences*. 4th ed.: Gulf Publishing, 1996.

注

1) “Culturistics(文化学)”という単語は筆者による造語(1995年より使用)である。

2) 栗原 優「学際的研究分野『比較文化学』(Comparative Culturistics)―「比較文化」から『比較文化学』の確立へ向けて―」『比較文化学論纂』芳賀 馨編. 開文社出版. 1998. p.41.

主要参考文献

古田 暁 監修『異文化コミュニケーション』

改訂版. 有斐閣. 1996.

堀口俊一 代表 *NEW TOTAL ENGLISH I*
学校図書. 2006.

栗原 優 『英単語 この意味を知ればこわくない』
講談社現代新書. 2000.

真田信治 他共著『社会言語学』おうふう. 1992.

重久 剛 編著『比較文化論』建帛社. 1987.

鈴木孝夫『日本語と外国語』岩波新書. 1990.

田中春美・田中幸子 編著『社会言語学への招待』
ミネルヴァ書房. 1996.

本名信行『文化を越えた伝え合い』開成出版. 1993.

文部科学省『中学校学習指導要領』改訂版. 2003.

文部科学省『中学校学習指導要領解説―外国語編―』
1999.

文部科学省『高等学校学習指導要領』改訂版 2004.

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編
英語編』1999.

文部省『高等学校学習指導要領』1989.

文部省『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語
編』1989.

Aiming at Ideal Foreign Language (English) Education—A Blind Spot of Cross-cultural Education—
Masaru Kurihara

[Abstract] Nowadays, foreign languages seem to be misunderstood as mere tools for communication. However, there is a big difference between teaching a foreign language itself and teaching its hidden culture through a foreign language. It is obvious that teaching a foreign language itself to the students is not equal to making them understand other cultures. The ideal foreign language education should aim at the latter part. That is, covert culture as well as overt culture should be taught by commanding foreign languages. For this purpose, it is important for instructors to learn other cultures. In this sense, studying ‘Sociolinguistics’ and ‘Comparative Culturistics’ is very important for foreign language instructors. Sometimes only one word which seems as a counterpart between two different languages will have other values. In this paper, the difference of the image of a Japanese word ‘tako’ and an English word ‘octopus’ is referred as an illustration.

[Key words] cross-cultural understanding, acculturation, foreign language (English) education, Sociolinguistics, Comparative Culturistics